イギリス小説100年

―イギリス小説史組み替えのためのささやかな素描―

大　林　幹　明

20世紀も終わりを迎えるにあたり，ここ100年のイギリス小説に就いて総括しておくことは，次の100年への展望となるはずです。

もっとも年の区分は単なる物理的なものにすぎず，小説を書くというきわめて精神的な活動とは本質的にはなんら関係がないとする考え方は，一理あります。ある一群の小説に見られる特徴が，別のそれと顕著に異なる現象がおきたときに，その年をもって区分をすることはあっても，あらかじめある年でもって区分してしまうのは論理が逆転しているという批判は確かにそうかもしれません。

同じようなことは王位の継承が起こったような場合についても言い得るでありましょう。イギリス文学史を見れば，ある王朝とその時代の小説の傾向とを結び付けて論ずることはよくあることです。しかし国王の交替は政治の世界のことであり，小説の創作がそれと論理的に直接関係しているとは言い難い。二つの傾向を異にする小説群の境目に，たまたま王の交替があったならともかく，ただ単に王が変わったことをもって区分の境界にするのは，あらかじめある年をもって区分してしまうのと同断であるとも言えます。

もっとも王の交替が人々の心に影響を与えることは考えられ，それによって精神的な営みに変化が現れるということは現実に起こり得る。特に個性の強い王の場合などそのことは一層顕著であるかもしれない。それが契機になって何か新しい考え方が起こったりすれば，それを反映する小説の傾向も当然に変化するだろう。我々の日常性を異化する契機には様々なものがあってその一つに過ぎないと考えれば納得は行く。

では年の変化は如何であろうか。恐らく年々の経過ごとに変化の契機となる

には短すぎるけれども，あるまとまりをもった年数が経過した際の境目となると可能性はある。世紀の変わり目を問題にするのは，まとまりを持った年数を100年と考える考え方に他ならない。この100年という数が妥当か否かはにわかに断言しがたい。何故なら最近人々がものを考える際の時間に対する意識は，かなり短くなっているという印象があって，かつて世紀末を意識した頃と現在とでは相当なずれがあるように思われ，近々20世紀が終わり次のそれが始まると，頭の中では理解していても，ではそれがどのようなものかとなると現実にはよく分からない，というのが真相ではなかろうか。今までの100年とこれから先の100年の違いを明確に意識しているとも思えない。ただ2000年あるいは2001年が特別な年であるという程度のものというのが正直なところかもしれない。特に近時言われているコンピュータの問題がなければ，なお希薄なものであるかもしれないが，少なくとも特別な時期であること，これが機になって意識の変化を引き起こす一つの要因になり得る年であると私は考えていて，それでは今まではどのようなものであったかを総括して置こうというのが今回の目的にほかならない。

過去100年のイギリス小説を総括する平凡ではあるがもっとも正統的な方法は，年の流れに沿ってその特徴を跡付けることであろう。100年はともかく，20年とか50年を区切ったこの種の試みはいろいろと行われていて，それぞれに工夫が凝らされていても，基本は時の流れに沿う扱いがなされるし，それは自然でもある。この方法はいわゆる歴史記述などの例からも分かるとおり，ごく普通に考えられることであってわかりやすいのが取り柄といえる。

G. S. Fraser の *The Modern Writer and His World* は今世紀前半のイギリス文学を概観したものであるが，その第２章を小説の記述に充てていて，1890年代すなわち20世紀に入る助走期とも言える部分を加えて７節に分けているのだが，おもしろいことにきれいに10年毎の区分がなされている。これは彼が恣意的にそうしたというのではなく，20世紀前半50年のイギリス小説を概観すると，ひとくくりにして捕らえられるような傾向が10年単位で現れていて，彼はそれを上手く示すようなタイトルを考え，その内容を説明しているのであって，で

はそれぞれのタイトルはというと，“Two Ancestors”から始まり，“Indian Summer”，“The Time of Transition (1910－20)”，“The ‘Gay’ 1920s”，“The ‘Serious’ 1930s”，“Looking Back and Forward in the 1940s”と続き最後に“The Novel in the 1950s”となっている。もっともこの本の初版は1950年で，私が現在参照しているのは1963年の第３版で出版は1963年であり1950年代の記述はそこで補充されたものであることが分かる。しかし何故このようなことになったかは分からないがきれいに10年毎の区分でそれぞれの時代の特徴が捉えられるような現象が起こっている事は考えてみれば不思議である。常識的に考えればこれほどまでに時の小説の傾向が10年毎の区切りに連動しているのは驚きという他ない。

しかしまた再び常識的に考えれば，このような現象が永久に続くとも考えにくい。むしろこのような現象はまれな例外であって，ごく普通におきることではないだろう。そのことは，我々の周囲に生起するもろもろの事象を子細に観察すれば，容易に納得できることである。もしこの本の著者が現在改訂版なり新しいものを書くとしたら，どのようにするであろうか。1950年以降のイギリスの小説家は，同様に都合よく10年毎に何らかの新機軸を出してくれているわけではない。

実際世紀後半を扱おうと思うと，とても前半のようにきれいに区分できる状況にないことは，その時代の小説に一通り目を通してみればすぐに了解できることである。もっともそういう試みは21世紀になってはじめて出来ることであって時期尚早なのかもしれない。前記した Fraser の著作が1950年であり今これから私が参照しようとする著作はいずれも1990年代はじめのものであるから，10年早いようにも思われるが，それほど妥当性を欠くものではない。

その一つ George Watson の *British Literature since 1945* は，題名から分かる通り，第２次世界大戦後のイギリス文学を論じたもので，小説だけを扱ったものではないが，これを見ると後半50年の総括は，もはや編年体的に出来るものではないことが容易に了解される。あるいはこれが文学全体だからとの異論が出されるならば，では D. J. Taylor の *After the War : The Novel and English Society since 1945* は如何であろうか。この本は Watson に遅れること２年1993年の出版であるが，ともにその始まりを1945年にとっていることがおもしろい。

題名からも分かる通り，こちらはもっぱら小説を扱っていて，この時期を包括的に扱ったものとしては大変おもしろく，読みでのあるものであるが，その第３章のタイトルに“Cross Currents of the 1950s”とあり，50年代に関する評価が与えられている。これをFraserの“The Novel in the 1950s”と比較してみればよく分かるのだけれども，後者はタイトルとはいえ実は何も言っていない。ただ50年代の小説と銘打っているだけで，その特色がなんであるのかは何も言っていない。それに対して前者は，50年代が新旧混沌の時期であることを端的に示している。この違いが出てきたのは時間の経過ということを考えねばならない。すなわちしかるべき時間が経たなければならないということであって，著者の能力ではない。しかし両者とも一応50年代はまとまりのある時期として認識していることが分かる。そしてTaylorがその先のイギリス小説の傾向を年代によって総括していないことは容易に理解できることである。ここではもはや年の区分と一群の小説のあらわす特徴とは何ら相関関係は認められない。しかしよく考えてみればそれが普通であって，常識に従うならばむしろ20世紀前半の現象こそ希有な例なのである。

そこで20世紀全体を通しての総括となるとどのようになろうか。前半に就いてたまたまあのような現象が起こったのであって，その背後にあるものは結局時代の傾向であるから，こだわる必要はないと考えることも出来なくはないだろう。それならば一応統一された哲学の基での総括は可能であろう。その場合の哲学とは，小説が人間のありようをその時代の様々な現象とともに登場人物の生き方を通じて表現すること，ということあたりに落ち着くだろうが，これは必ずしも明快な指針とはなりがたい。

今ここにMalcolm Bradburyの手になる*The Modern British Novel*があって，彼はこの書により，ここ100年のイギリス小説を正統的な手法によって卒なく総括しているが，説明について何か新しい視点が導入されているかといえば，特にそのようなものはなく，従来いわれていたことを超えるものがあるわけではないし，特に最後の方では主要な作品のリストがあるに過ぎない。そしてここに導入された時間の単位は15年であって，恐らくそれは始めに1945年という年が来て，それを軸にして全体を眺めてみるとちょうど15年という単位が実態に

も合い，またきれいに整って説明できるということであろうし，また実際そのとうりでもあるわけで，多分これに勝るまとめは難しいであろう。しかしそれにもかかわらず不満が残るのは何故であろうか。

ごく最近のイギリス小説事情に関して考えてみると，社会のめまぐるしい変化を反映して，実に多様で混沌としたものになっていることに気がつく。いくつかの例を挙げるとその辺の事情がはっきりすると思うので具体的に分類して示してみる。まず① Irvine Welsh の *Trainspotting* と *Ecstasy*。ついで② Sebastian Faulks の *Birdsong* と Louis de Bernières の *Captain Corelli's Mandolin* に Pat Barker の *The Ghost Road*。③ Linda Jaivin の *Eat Me* と Michele Roberts の *Flesh & Blood* そして Susanna Moore の *In the Cut*。④ Michael Ondaatje, *The English Patient* と，⑤ Helen Fielding の *Bridget Jones's Diary* 等である。

①はもちろん現代イギリスの若い世代の一側面をスコットランド出身という立場を背景に描き出した作品であり，前者は映画化もされ多大の注目を集めている話題作。②については，1995年が第２次世界大戦終了50年，さらには第１次世界大戦のそれからは約75年という事情を背景にして，それらの戦争の影響あるいはその負の遺産に関する関心が高まっているという事情の下にかかれた多くの作品の中でも特に話題となったもの。③に関してはアメリカ在住で作品を書いている作者もあり従来の厳密な意味でのイギリス小説とは若干外れるがあえて触れておけばこれらは若い世代の生活に及ぶ内容なのだがセックスや空想を通しての特に女性層の意識や感覚を鋭く突いたことで読者を獲得その傾向は⑤にも連なっていて，②とはまったく違っており，それらの落差は一見して明らかである。その間にあって④は戦争とか歴史といったものを②とは別な観点から照射していて，少し古くなるが Penelope Lively の *Moon Tiger* を思わせるものがある

これらに加えて Ian McEwan の最新作 *Amsterdam* を始めとする諸作品や，一般に人気のある Joanna Trollope や Maeve Binchy といった諸作家のものを念頭に思い浮かべてみれば，その話題の広さというものは驚くほどであり，イギリスの人々の日常生活の中にかくも多様な相があったのかと，改めて目をみはる思いがする。もちろん例えばカナビスのような覚醒剤の使用とか，10代の妊

娠，シングルマザー，湾岸戦争やフォークランド紛争の後遺症，スリーズという言葉に表されるような，政治家や要路の人たちの好ましからざる行為など，一応知識としては承知していても，小説という形で具体的に示されると，その実態に対する具体的イメージが醸成されて，その存在を強く印象付けられると同時に，改めて納得させられ，そこから小説がそういった多様な社会の実際を映し出していることを知る。

このような状態が溯って100年にわたれば，時代を追ってしかるべき基準を設け総括していくに際し，歴史記述に類似したやり方は，結局小説の全体像をまとめることにならず，無限に発散してしまう危険がある。また幾年かすぎた時期に，過去を振り返ってでは，それらが小説世界全体としての位置づけはとなった時に，直線的な流れの延長線上にプロットされるに止まるのではなかろうか。

筆者はかつて Paul Theroux の *The London Embassy* ほか５編の短篇小説集に関して，その構成と意味に就いて次のような議論をした。これらの短篇小説集は形の上では短篇小説集で幾つかの作品の集合体であるが，それがただ単なる集合ではなく，全体として有機的一体をなしている。上記 Theroux の作品について言えば，集中の各作品はもちろんそれぞれ独立したものとしてみとめられるものではあるが，作品を全体としてみた場合，題名 *The London Embassy* が示すごとく，これはロンドンのアメリカ大使館において繰り広げられる，職員とそこを訪れる人々，事件を含む人間模様であると同時に，ロンドンの全体像の描写でもある。言い換えるならば，個々の一編はそれぞれが一つの世界を構成し，そのような個々の世界が集まり，全体として又別のより大きな世界が出来上がる。もとより他の多くの短篇集がそのような構成になっていないというものではない。多かれ少なかれ，いずれの短篇集であれそのような効果はそれぞれの作者によって意図されている。ただそのようなものが題名などを通して強調されているかとなると疑問があり，客観的に判断し得るという観点に立って考えた結果として５つの作品を俎上に載せた。

他の４つの作品はロンドンをテーマとしたものがもう一編，スコットランドの架空のひなびた村を題材として取り上げたものが一編，登場人物が同じ小学

校を卒業したという点に焦点を当てたもの，そして白日夢という話題を中心に据えたもの各一編である。これらはいずれも短い作品を集めたものであり，したがって集中の各作品を個別に読めば，それはそれとしておもしろく楽しめるものではあるが，それらが集まった全体の作品は，個々の作品の味わいを生かすと同時に，全体としての作品はそれらが程よく相互に働きあって，豊潤なカクテルを味わうごとく，全体のテーマが浮かび上がってくる。単なる集合物ではなく，それぞれの作品を個々の元素とする新たな化合物を見るようになっていることが理解される。

そのような考えにたってみると，実はその基のところにJames Joyceの*Dubliners*があって，この作品は21の独立して読むことの出来る短篇が集められてはいるが，全体としてダブリンのことを描き出している。言い換えれば個々の独立した作品はそれぞれに一編の作品として味わうことが出来ると同時に，それらが集まった*Dubliners*という作品は，彼に言わせれば「知的麻痺」をテーマとしたダブリンの全体像に集約される。それはこの作品が個々の短篇小説の単なる寄せ集め，集合に過ぎないのではなく，総体として有機的一体となっている。このように見てくるならば，私が取り上げた５つの作品は，つまるところJoyceの作品のバリエーションといってもよく，それらはここでも一体のものを構成していることになる。

では長編に就いて如何考えたら良いか。ここではAnthony Powellをとりあげる。彼が1951年にだした*A Question of Upbringing*に始まり1975年完結した*Hearing Secret Harmonies*におわる全12巻の作品群は‘A Dance to the Music of Time’として知られている。体裁はNicholas Jenkinsが語り手となり展開される長い物語である。その中では彼の一家を始めとしてStringham, Templer, Tollandその他幾つかの家族が登場しKenneth Widmerpoolのような特色ある人物も現れ，今世紀のかなりの期間を取り込むような話しになっている。しかしそれらを構成する12の物語はそれぞれ独立したタイトルをもち，一つの完結した物語として読むことが出来るように組み立てられていて，全12部から成る‘A Dance to the Music of Time’という一巻の小説があるのではない。ここには自己の存在を主張する小説が集まり，そこに一つの‘A Dance to the Music of Time’

という世界が作り上げられている。これあたかも先に取り上げた短篇小説の構成と軌を一にするものである。人あるいは大河小説という。あるいはそのように呼んでも良いかもしれない。しかし問題はそのような呼び方によって何を意味するかである。

別の例を考えてみる。ちょうど同じ頃 Doris Lessing は *Martha Quest* に始まり *The Four-Gated City* におわる5巻から成る物語群 'Children of Violence' をあらわした。これは Martha Quest という，ローデシア生まれの女性の物語を通して，その背後にある社会のありようを描いたものであり，とくに女性が社会において次第にその地位を広げ，かつ確かにし，その中で個人と全体との関係を追及する，規模の大きな作品なのである。ここにおける個々の作品と全体との関係も Powell のものと同じなのである。じつは Paul Threuox にならべて，ロンドンに関する短篇を集めた作品を検討した際に取り上げたものが，彼女の手に成る *London Observed* であって，彼女の作品には更に同種の試みがある事に注目する必要がある。

このように長いものではないけれども例えば Evelyn Waugh が *Men at Arms, Officers and Gentlemen, Unconditional Surrender* の3部作を書いたり，Margaret Drabble が同じように *The Radiant Way, A Natural Curiosity, The Gate of Ivory* の3作で，それぞれの作品の独立性，完結性を保ちながらも，他方でそれらを総合して一つのまとまりを持たせようとした例なども，個々の作品と全体とのありようを追及しながら，そこから見られる世界がどのようなものであるかを追い求めたた姿勢が明らかになっている。

ここで時代を溯り John Galsworthy について考えてみたい。彼の作品に Forsyte 家に関する一連の小説群がある。通常は 'Forsyte Chronicle' などともいわれ *Forsyte Saga* と呼ばれる3作品 *The Man of Property, In Chancery, To Let*, 続いて *A Modern Comedy* を構成する3作品 *The White Monkey, The Silver Spoon, Swan Song*, そして *End of the Chapter* のもとに *Maid in Waiting, Flowering Wilderness, Over the River* と，全体として3部作の3部作という構成になっているのだが，時に最初の6部のみを考える場合もあり，その辺は論者によって違いが出てくる。その原因は最後の3部とその前の6部との繋が

りを如何考えるかによる。*End of the Chapter* は Charwell 家を中心とした物語であって，Forsyte 家との結びつきはというと，主人公 Dinny の従兄弟 Michael が結婚する相手が Fleur で，彼女は *The Man of Property* で登場した June の祖父 Old Jolyon の弟で James Forsyte の孫という繋がりに成っているためであるが，体系の美を考えてここでは全9部を対象とすると，これらは1886年から1932年までを扱っていることになり，書かれたのは1906年から1933年にかけてである。Galsworthy の‘Forsyte Chronicle’を指摘したのは，この作品が前記した Powell その他の作品の基にあると考えられるために他ならない。

そしてこれらの作品群の背後に流れるものは何であろうか。実はそこに人間社会に対する基本的認識が見られるというのが私の考えであり，それはこれまでの論からも明らかなとうり次のようなことにまとめられよう。我々のありようは一方において個人の存在としてあり，それは更にある年の，ある日の，ある時の，というように小さく小さく無限に刻んでいくことが出来る。一方個人から家族，一族，先祖，子孫というように大きく大きく膨らんでも行く。もし小説がこのような諸側面を描こうとするならば，一方においてごく短い，時には一瞬の相を捕らえて表現することが要請される。短篇小説の一編はまさにこの一瞬の相の表現に他ならない。となれば次の相をあらわすには，既に述べたごとくあるテーマによりこれらを集めて総合する事でなされる。繰り返すようだが，ただ単なる寄せ集めではない，豊潤なカクテルに仕上げられた味わい豊かな作品となっている。カクテルにはその特色をあらわす魅力的な名前があるごとく短篇集の名前も同様である。そこにおいて各短篇はみずからの命を主張するとともに，新たな短篇集の中で別の命を獲得して輝きを増す。同じ関係は長編小説とそれを基にして構成される作品群にも当てはまる。それが3部作形式であれ，大河小説といわれるものであれ，シリーズ形式によるものであれ，論理は何らかわるものではない。一編の小説はそれによって人生のあるいは一族その他のある局面をあらわすであろうし，それらが総合された作品はある人物の一代記をなすであろうし，ある一族の年代記であったり，またある階級の栄枯盛衰であったり，その他諸々の世界を我々読者に提供してくれるであろう。

イギリス100年の小説の歩みは片や Joyce の *Dubliners* を型とするものと，他

方 Galsworthy を範とする流れとになり，両々あいまってそれらの間に生起する日常の幾多の営みの諸相を描く作品によって構成されてきたというべきである。ここでは，全小説というものがあたかも宇宙の星のような存在として認識できると考えることも可能になる。すなわち，類を同じくする小説群は星雲であり，シリーズをなす小説群は銀河系，テーマを持った短篇集は星座とでも言い得ようか。そして無数に存在する作品は，宇宙に存在するあまたの星とでも表現できるとするならば，次々に書かれる作品はあたかも次々と発見される星にも似て，我々を取り巻く天体をますます豊かにしてくれる。かくのごとく認識することにより，単に直線的に流れる時の延長線上に新たな作品が出るのをある時間まってそれらの傾向を跡付けるのではなく，全宇宙という一つのまとまりをもった枠の中で新しい作品が書かれる毎に，それがどのようなところに現れたかを位置づけながら新たな姿を見せてくれる新しい星空の世界を見るにも似た喜びを獲得することになる。小説を読むことの楽しさとはこのような過程を経て新しく拡大された世界を知り，新たな自分の存在を確認することにあるはずであり，過去100年のイギリス小説においては実に多くの新しい星や星座が発見された時代と総括することが可能になる。

作品以外の次の４点を挙げておきます。

Bradbury, Malcolm. *The Modern British Novel.* Harmondsworth: Penguin, 1994.

Fraser, G. S. *The Modern Writer and His World.* Harmondsworth: Pelican,1964.

Taylor, D. J. *After the War: The Novel and English Society since 1945.* London: Chatto & Windus, 1993.

Watson, George. *British Literature since 1945.* London: Macmillan, 1991.